

恥辱の時代

加賀美

辱の時代

加賀美
実

文化総合出版

■著者略歴

明治四十四年一月二十六日、山梨県東八代郡八代町、南三三二番地（現住所）の農家に生れる。

小学校卒業以降、家に在って農業に従事。青年時代農民運動に参加したり、文芸同人雑誌を発行した事がある。

その頃の作品をまとめて、昭和四十二年創作集『昭和初年の青春』を出版。

現在「作家」「中部文学」同人。

恥辱の時代

昭和 49 年 4 月 10 日 発行

著 者 ^{かがみ}加賀美 ^{みのる}実

発行者 田 中 亨

発行所 株式会社 文化総合出版

郵便番号113 東京都文京区本郷2-3-10 お茶の水ビル

電 話 (03)811-1160 振替口座<東京>155576

印刷所 信毎書籍印刷

製本所 宮田製本所

—定価 880 円

© Minoru Kagami, Printed in Japan 1974

0093-74008-7436

序

熊王徳平

加賀美と私との交友は随分古い。

はじめて知った時の彼は未だ二十を過ぎたばかりの若者で、髪は房々としており、まったくの美青年だった。

それが今や六十歳半ばに近く、すっかり頭も禿げてしまい、文字通りの好々爺と変った。お互に齢を取った。

私が、日本プロレタリア作家同盟山梨支部の活動をしていた頃、加賀美実は今農全会派の活動家だった。そうして彼は治安維持法で獄に繋がれる。その事がこの集に収められた二つの作品に描かれている。

少年時代、彼は秀才であったと聞いていた。無論、そうであつたらう。姉達の末子に男と生れた加賀美実、百姓である農家を継がなくてはならなかつた。向学心は折られた。その事も、この集に描かれている。

だが、それでよかつたのではないか。彼が若し、男兄弟の末子であつたならば、平凡な官吏で終つていたろうと私は思う。

人生は波瀾重畳であつた方が文学的だ。これは私の主張である。

敗戦。日本共産党山梨県委員会が発足した時、加賀美実と私とは再会した。彼は県委員に推された。然し、余り活動はしなかつた。組織に批判的であつたというよりも、政治よりも、文学に牽かれていたと見る可きであらう。

事実、加賀美実ほどの読書家を私は知っていない。

前著『昭和初年の青春』を出版した日より、加賀美実と私との交友はいつそう深まつた。「作家」同人に推薦したのも私であつた。一年に一編か二編の作品を『作家』へ発表して来た。

加賀美実が決して、筆で喰う人間に成ろうとは考えていない。米を作り、葡萄を作り乍ら書く。それがほんとうの文学であると近頃私は考えている。

賈紙幣を作るように原稿を書き、軽井沢へ別荘を構え、高級車を乗り回し、ゴルフに興

じたからとて、それに何の価値があるう。馬鹿だ。

幸い、私はそのような作家ではないが、文筆に頼り糊口を凌いでいるのを嘆く。加賀美実の如く、生業を持ち、書きたい物だけを、書きたい時に、書くべきであった。宇野浩二先生にそう私は教えられていた筈であったのに。

詩人村野四郎先生は「百人に一回読まれる詩よりも、一人に百回読まれる詩を書きたい」と言っておられる。この言葉を私は大好きだ。

蓋し、この集に収めた加賀美実の作品は、村野四郎先生の言葉に充分答えているのではあるまいか。百回も、いや、二百回も私は読む。

加賀美実には酒も飲まず、煙草も喫わない。昔から、女にも手を出さない。言わば模範老年だ。不良老年の私とは、対照的ですからもある。

故に、加賀美実の文学には、腹を抱えて笑わせるような物はないが、それはそれでよく、私は尊敬している。加賀美実と私の交友が益々深まって行くのは、寧ろ、対照的である為かも知れぬ。

加賀美実がこれからも書き続け、さらに、第三、第四の本を出す日を期待しよう。

一九七四年二月七日

目次

序

熊王徳平

家

庭

一

夜

水

元

法

被

允

恥

辱の

時代

二七

上

京

一五

老

狂

一六

加賀美実の文学

島一春

三一

家

庭

一

小学校尋常科卒業の時、級友の幾人かは、入学試験を受けて中等学校へ進学して行ったが、それを見送りながら、私は別に何とも思わなかった。貧乏な小作人の一人息子である私と違って、彼等はいずれも、地主か医者か役場吏員か、村内有力者の子弟だったので、それは当然のことであつた。

私の家ではそれどころではなかった。四人もある私の姉たちはみな、義務教育の尋常科六年だけでやめさせられて、町の製糸工場へ行ったり、家の野良仕事を手伝わされて来たのであつた。私は高等科に行かせて貰い、それだけでも、有難い事だった。

二年後の高等科卒業の時になって、その私に中学校進学を勧めたのは、川村先生であつた。

四月、南方の山裾の村から転任して来て私たちの受持になった彼は、秋も晩くなった或る夕方、級長としてその日の出席簿をつけに教員室へ行った私をとらえて、卒業後の進路について尋ね、家で百姓をしながら中学講義録で勉強するのだという私の決心を聞くと、

「君は、何処の学校にもあるような普通の成績のよい生徒とは違うのだから、中学校へ行かなければもったいない。中学校だけ行っておけば、あとは独学でもいいが、中学校から独学というのは、

何としても無理だ。中学校だけは是非行つとく必要がある」

そして、持っていた鉛筆を左手で机の上に真直ぐに立て、右手の人差指と拇指でそれを計って見せながら、

「講義録で、独学で、秋山がこれからこれまで伸びられるとすれば、中学校へ行けば更にこの上これだけ、伸びる事が出来るんだ」

その明白な論証に心を打たれながらもなおためらっている私を見ると、

「学費なら、若尾の奨学金を貰ってやる。君なら、貰える」

と励ますように言った。

赴任の挨拶に朝礼台に立った時の川村先生は、険のある切れ長な眼を眇めるようにして私たちを見廻して、少し意地悪そうに見えたが、私たちの予想を裏切って今は全校の尊敬と信頼を集めていた。いつの間にそんなようになったのか、一番ハッキリ思い出されるのは、赴任して二十日ばかり経った或る朝の国語の時間の事であった。十五分ばかり遅れて教室へ入って来た彼は、

「私は、今朝、身体の具合が少し悪くて、学校へ来るのが三十分ばかり遅くなっていました。はじめ、遅れた、と気がついた時、私は思いました。どうせ遅れちゃったんだ。今からあわてて行ってもどうせ遅刻を取返すわけにはゆかない。いっその事、今日一日はこのまま休んでしまおう。そう思いました。けれども、又すぐ思い返して、いやいやそうではない。今行けば三十分の遅刻だ

けで済むものを、三十分の遅刻を恐れて一日休むという事は、小さな過ちの上に又大きな過ちを重ねる事になるのである。小さな罪を恐れて、更に大きな罪を犯してはならない。我慢して行こう。そう反省して私は、急いで起きて支度をして、出て来たのであります」

教師というものから、このような心を開いた言葉を聞かされたのは始めてであった。そこから私たちは、教師という殻を破った、弱点と悩みを持った一個の裸の人間を感じとる事が出来た。

そんな事から、意地悪げに見えた彼の光る眸は、澄んだ暖か味のあるものとして、私たちに映り始めた。教頭である彼の熱心な指導の上に、新しい教育上の試みが次々と実施され、情性で動いていた灰色の学校生活は、半歳ぐらいの間に、自発性のある活気に満ちたものに変っていった。

「ベストを尽せ」

「自らを治めよ」

彼が唱え出したそれ等の新しい合言葉が言い交わされ、厄介な嫌われものであった放課後の清掃作業までも、自己鍛練の場として、みな喜んで参加するようになった。先生の話が最も精彩を放つのは、「修身」の時間であった。黒板に白墨で文字や線を描きながら彼は説いた。

「人間には、生れながらにして皆良心というものがあります。良心。ところが一方、七情五慾というような諸々の感情や慾望があつて、それ等がこの良心の囲りをこのように取り繞いていて、良心の光を覆つて外へ現さないようにしています。七情とは、喜怒哀楽愛憎欲、の七つ、五慾とは、眼

耳鼻口、それに皮膚、これを五官といいますが、この五官に発する五つの慾望、眼は美しい物を見たいと思う、耳はよい音を聞きたいと思う、鼻はよい匂いを嗅ぎたいと思う、口は美味しい物を食べたいと思う、皮膚はよい物に触りたいと思う。この五つの慾望を五慾というが、これ等、七情五慾を理性の力で抑えつけて、良心の圜りのこの殻を取り去って、その光を外へ輝き出させるようにするのが、修養、です。教育、です。そして修養と教育の力によってそこに形造られるのが、秀れた、人格、です。だから、秀れた人格を持った良い人間になるためには、私たちは絶えず、この悪い感情や慾望を抑えつけて、弱らせ、消滅させるように、努力を、しなければなりません。われわれの教育や修養とは、ひと言でいえば、だから、この肉体と精神を出来るだけ苦しめる事だということが出来ます。肉体と精神を出来るだけ苦しめ、良心の光を出来るだけ大きくし、秀れた人格を育て上げるのが、私たちの教育の目的なのであります。憂き事のおこの上に積れかし、限りある身の力驗さん。昔の人も皆こうして自分を苦しめて、偉大な人間になったのです」

彼の話し振りは熱を帯びて滑らかで、そして話題は豊富であつた。その頃まだ珍しかった社会主義というものについても彼は言った。

「社会主義というものも、決して悪いものではありません。個人主義は、個人を良くする事によって社会全体を良くしようとするものですが、社会主義とは、社会全体を良くする事によって個人をも良くしようという主義で、目的は個人主義と同じなのです。ただ、そうするためには、非道な

事をするブルジョアを倒さねばならない。その破壊の行動だけを見て、その精神を見ず、悪いものだと言間では言うのです」

こうした彼の教育によって、無智な田舎の子供は、短時日の間に、夢多い一人の「少年」に育っていた。充実に来た学校の図書室が、この変化に拍車を加えた。徳富蘆花や国木田独歩の本から、自然や人生の持つ深い謎を感じ取り、自分の人生を如何に送るべきかを考え始めていた。

このようにして芽生えた私の中学進学の願いは、しかし、私の家を震撼させた。

気の小さい父は、教員室へ乗り込んで行って、

「中学校へなんやれば、おらん家は、つぶれちまう」

と、涙をポロポロこぼしながら、川村先生に抗議した。

母は、学校へ行って学問したために肺病になって死んでしまった自分の姉の一人息子の例を引いて、反対した。

庭
カラな義兄は隣のN村の役場の書記であった。

家
「中学校へ行きたいというお前の気持も無理はねえが、少しは家の事情というものを考えろ。これが、親がもっと若いとか、他に男兄弟でもあるなら、どんなに無理でも俺たちもお父さんをお願い

してやるだけんど、何しろ男はお前一人でお父さんはもう六十だ。どう考えても無理な話だ。勝代姉さんに婿をとればいいってお前は言うけれど、法定の推定相続人がある所へ婿など来手があるもんか。そんな事をすれば後の騒ぎの元だ。西村の柴太やんが好い例だ。お父さんはそれが嫌で、苦勞しながらお前のでかくなるのを今まで待っていたのじゃねえか。総領の石和の姉さんが嫁に行く時、世間の人は言ったそうだ。藤やんじゃ、あんな小っくいぼこを当て事にして、あんなよい娘をやってももうずらかつて。そのお父さんの氣持を、お前も少しは考えてやってくりよう。全く、お父さんは、お前の大きくなるのを、両手で引っ吊り伸ばしてえ位に思っていただっぢゅうからなあ」

義兄の親戚で地理の教師である落合先生も顔を出して言った。

「君には同情する。君のお父さんにも同情する。されば、中間を採って、中学の代りに養蚕学校へやって貰ったらどうだろう」

彼は、私が親と衝突して家を飛び出すとも思っていたのか、先日も地理の時間に、世界の中でも人口密度の高いわが国の、東京で、働きながら苦學するという事が如何に困難であるかを長々と説明して、暗に私を戒めた。しかし、首席を奪われた事で川村先生を恨み、受持である私たちの級にまで辛く当る、ひねくれた意地悪いこの落合先生を私たちは信用してはいなかった。落合先生の折衷案は私が承知しなかったばかりでなく、義兄からも賛成されなかった。どんな理由を並べようと、金のないという事が、私を学校へやれない唯一の理由である事を、義兄も又知っていたのである。

卒業の近い三月になると、私の中学進学問題は、級友たちの間にも知れわたって行った。真相を知らない彼等は、

「文^{ふみ}さんは、中学校へ行くだちゅうじゃんか」

と「中学校」へ力を入れて私をからかった。

放課後居残って特別教育を受けている進学組のなかにさえ、こんな事を言ってからかわれる者は誰もなかったところから見て、私のような小作人の俸が中学校へ行くという事は、彼等にも心外に思えたのであろう。

入学願書の締切りが明日という三月十四日。川村先生は、校舎の裏の宿直室の所へ私を呼んで、

昨夜、私の父が抗議のため校長の下宿先を訪ねた事を告げ、

「事態はいよいよ容易ではなくなった。この上はただ神に祈れ。神頼みまでして尚かつ聞き入れられなかったならば、その時始めて、これが最善だと思ってそれに従え」

と声を強めて言った。そして、

「どのような事になろうと、とにかく入学願書だけは出しておこう。あさってから試験で願書の締切りは明日一杯だから。これを持って行ってお父さんの名前のところへ判を押して、明日中に日川の中学校まで届けて来い」

渡された封筒を持って帰ろうとすると、

「一寸待て」

と呼び止めて先生は洋服のポケットから小さな財布を取出し、

「これは受験料だ。先生があげる」

と、大きい一円の黄色い紙幣を一枚、私の掌へ握らせてくれた。

その日は氏神の祭の前日だったので、家の中は親戚の子供たちで賑わっていた。私の机のある奥座敷では、野良着を脱いだ父が、Nの義兄と、卓袱台を挟んでお茶をのんでいた。「舅と麦は踏むほど好い」という諺に従って、この義兄は、日曜ごとに夜姉を連れてやって来て、新婚夫婦特有の華やかな雰囲気、古びた私の家の中へまき散らしていたのだが、土曜日と宵祭が重なった今日は特に昼間のうちから招かれて来ていたのだった。

勉強の場所を奪われた恰好になったのを幸いに、私は納戸に入って父の認印を探した。けれども、それが何時も在る筆筒の小引出しの古い文箱の中には、サックに入った厳めしい父の実印だけがあって認印はなかった。私は、家の人たちに気取られぬようにそれとなく、不断それが転んでいるような場所、長火鉢の引出し、仏壇の戸棚の隅、座敷の低い棚の上の硯箱などを探して廻ったが、何処にもそれは見当らなかった。

奥座敷で談笑している父たちは、この私の窮状を見抜いて、秘かに嘲笑っているかのようであっ